

資料編

1 タウンミーティング報告

環境づくりタウンミーティング 開催状況

――千葉県環境基本計画、(仮称)生物多様性ちば県戦略、千葉県環境学習基本方針、ちば環境再生計画、の見直し、策定に向けて――

	開催日	時刻	地域	会場	名称	主催団体	参加人員
1	10/22 (日)	13:00 ～ 17:00	千葉市	あすみが丘プラザ	ESD地域ミーティングin土気	緑の環・協議会	48人
2	10/27 (金)	17:00 ～ 18:10	船橋市	船橋市北部公民館	環境づくりタウンミーティング(印旛沼わいわい会議後)	環境パートナーシップちば	25人
3	11/9 (木)	17:20 ～ 18:20	成田市	成田国際文化会館	生命のにぎわいとつながり(印旛沼わいわい会議後)	手賀沼・印旛沼生物多様性保全・再生実行委員会	30人
4	11/19 (日)	13:20 ～ 16:20	千葉市	幕張公民館	・講演会 農業を使用しない環境にやさしい庭づくり ・生物多様性の保全について	農業空中散布反対千葉県ネットワーク	15人
5	11/24 (金)	18:00 ～ 20:30	大網白里町	大網白里町中央公民館	生物多様性保全について 大網白里町からの提案	環境会議おおあみしらさと21	27人
6	11/25 (土)	13:00 ～ 17:00	東葛・葛南	和洋女子大学・東館	東葛・葛南地区生物多様性タウンミーティング	環境タウンミーティング東葛・葛南実行委員会	42人
7	11/26 (日)	13:30 ～ 16:00	香取市	佐原中央公民館	「千葉県の環境づくり」タウンミーティング香取地域からの提案	「千葉県の環境づくり」タウンミーティング実行委員会 香取グループ	57人
8	11/26 (日)	13:30 ～ 16:30	四街道市	四街道市文化センター	千葉県「生物多様性ちば戦略」四街道タウンミーティングPART1 「21世紀も人間は動物である」	タウンミーティング四街道実行委員会	100人
9	12/10 (日)	13:00 ～ 16:30			千葉県「生物多様性ちば戦略」四街道タウンミーティングPART2 「生物多様性の重要性について」		77人
10	11/28 (火)	18:30 ～ 21:00	千葉市	千葉市民会館	環境づくりタウンミーティングinちば「千葉県環境学習基本方針」について	環境づくりタウンミーティングinちば実行委員会	39人
11	12/2 (土)	13:30 ～ 16:00	佐倉市	佐倉市役所社会福祉センター大会議室	命のにぎわいと印旛沼――谷津田・里山そして川	環境タウンミーティングちば佐倉グループ実行委員会	70人
12	12/4 (月)	14:00 ～ 16:30	君津市	君津市役所	君津地域における生物多様性保全と市民生活のかかわり	君津地域タウンミーティング実行委員会	80人
13	12/9 (土)	13:30 ～ 16:30	山武市	山武市成東文化会館	環境・自然・里やまの山武市タウンミーティング	環境・自然・里山のタウンミーティング実行委員会	62人
14	12/10 (日)	13:00 ～ 16:15	千葉市	千葉県立中央博物館	環境タウンミーティングちば	環境タウンミーティングちば	70人
15	12/10 (日)	13:30 ～ 16:15	印西市	東京電機大学 福田ホール	北総里山タウンミーティング――生物多様性ちば県戦略づくりにむけて――	北総里山タウンミーティング実行委員会	210人
16	12/12 (火)	15:30 ～ 17:30	我孫子市・柏市	柏市民活動センター	生物多様性ちば県戦略タウンミーティング	千葉県の生物多様性を考える会	37人
17	12/16 (土)	17:00 ～ 20:00	いすみ市	いすみ市役所	外房地区タウンミーティング	外房地区タウンミーティング実行委員会	50人
18	12/17 (日)	11:00 ～ 12:30	松戸市	松戸市市民会館	千葉県の環境づくりタウンミーティング	環境タウンミーティング松戸	52人
19	12/17 (日)	13:30 ～ 16:00	南房総地域	ろくすけ	わくわくする里づくりの実践～地域の声よ、想いよ、とどけ～	安房地域実行委員会・千葉自然学校	21人
20	12/23 (土)	13:00 ～ 16:30	千葉市	千葉県立中央博物館	環境タウンミーティング 総括大会	「千葉県の環境づくり」タウンミーティング実行委員会	170人

参加者総計 1,282名

環境づくりタウンミーティング総括大会

日時：2006年12月23日 13:00～16:30

会場：千葉県立中央博物館講堂

プログラム

(名称は敬称略)

13:00 開会挨拶

趣旨説明：栗原 裕 治

13:05 各地のタウンミーティングからの報告

- | | |
|-----------------------------|--------|
| 1.緑の環・協議会 | 奥山 淳 |
| 2.環境パートナーシップちば | 加藤 賢三 |
| 3.手賀沼・印旛沼生物多様性保全・再生実行委員会 | 荒尾 稔 |
| 4.農薬空中散布反対千葉県ネットワーク | 井村 弘子 |
| 5.環境会議おおあみしらさと21 | 武井 實 |
| 6.環境タウンミーティング東葛・葛南実行委員会 | 佐野 郷美 |
| 7.環境タウンミーティングちば実行委員会香取グループ | 飯田 伸治 |
| 8.タウンミーティング四街道実行委員会 | 任海 正衛 |
| 9.環境づくりタウンミーティングinちば実行委員会 | 横山 清美 |
| 10.環境タウンミーティングちば佐倉グループ実行委員会 | 美島 康男 |
| 11.君津地域タウンミーティング実行委員会 | 尾崎 煙雄 |
| 12.環境・自然・里山のタウンミーティング実行委員会 | 能勢 正代 |
| 13.環境タウンミーティングちば | 桑波田 和子 |
| 14.北総里山タウンミーティング実行委員会 | 丹澤 正直 |
| 15.千葉県の生物多様性を考える会 | 松清 智洋 |
| 16.外房地区タウンミーティング実行委員会 | 手塚 幸夫 |
| 17.環境タウンミーティング松戸 | 中岡 丈恵 |
| 18.安房地域実行委員会、千葉自然学校 | 土居 元 |

コーディネータ：鈴木 優子

14:15 論点整理【県民の意見・提案を整理する】

ファシリテータ：金 親 博 榮
佐 野 郷 美
手 塚 幸 夫

15:00 休憩

15:10 パネルディスカッション【今後の仕組み・取り組みについて考える】

パネリスト：堂 本 暁 子 (千葉県知事)

大 澤 雅 彦 (東京大学大学院教授 / 「(仮称)生物多様性ちば県
戦略」専門委員会委員長)

原 慶太郎 (東京情報大学教授 / 「(仮称)生物多様性ちば県
戦略」専門委員会副委員長)

小 西 由希子

任 海 正 衛

司会・進行：栗 原 裕 治

16:25 閉会挨拶

まとめ：加 藤 賢 三

16:30 終了

総合司会：川 本 幸 立

記 録：荒 尾 稔

タウンミーティングの名称	参加人数
主催グループ名 緑の環・協議会	代表者名 奥 山 淳
実行委員名	
開催日時 2006年 10月 22日 13時 分 ~ 17時 分	
開催場所 千葉県あすみが丘プラザ	
プログラムの概要	
論点整理	
1.解決が必要な問題 ●産廃処分場計画地(違法砂利採取)跡地復旧 土地所有者のやること／行政への協力要請／地域住民の意識の高揚と参加	
2.現在:実践されている取り組み(効果と課題) まだ取り組み始めて短期間のため以下のようです。 (1)土地所有者との協議(主体者が何を指すべきか意思を形成していく。プロセスで勉強が必要) (2)勉強と調査(何ができるのか、などの知恵を集めること。場作り、調査検討にも専門研究が必須) (3)行政への協力要請の準備と下交渉(制度政策の比較検討を行う。縦割り・要件前提のしぼり) (4)地域住民への啓蒙(跡地問題に理解と協力参加要請、具体的方策、道筋が見えないと困難)	
3.今後の取り組みについての提案(想定される効果と課題) (1)跡地復旧円卓会議と復旧プロジェクトへの包括支援 ・わが国の地球温暖化防止のため森林のCO2の吸収源は想定よりも激減しており、荒地からの多目的な森林育成のテストケースとして、プロセスを含めた施策支援 ・違法砂利採取後の荒地には現に森林が存在せず、里地里山対策等でも森林を一気に2ha増	

大きせるような施策は適用されるのか不明。

- ・効果として、CO2吸収源を確保するとともに、荒地からの森林造成・維持・活用プロセスの知見が得られ適用例を拡大できる。
- ・課題は、土地所有者の資金力・労働力は限られておるため、国、県、市、民間企業の社会貢献、都市住民の退職者などを巻き込むための政策誘導、参加者への特典など仕掛けが必要である。

(2) 村田川減流域自然公園

- ・現流域はかなり広範囲に放置田があり、活用による生物多様性、景観確保を検討する。開発地の隣接地域では都市住民に地権者が実際農業を指導するなどの体制がない点を(1)と関連して研究する。
- ・村田川源流域の生物多様性を確保できるが、跡地普及の直接支援については、里山振興政策の対象としてなりにくい(現況荒地は対象にならないかなりにくい)

(3) 3R特に生ゴミ処理機と肥料の活用実験

- ・廃棄物処理の根本的問題は都市生活部分から発生するゴミの処理にあるため、生活ゴミを中心にその削減に取り組む。
- ・生ごみを減らし肥料化したものを街の花を増やす運動と周辺地域の農業生産者への還元について必要条件等を試すこと
- ・効果はごみ減量、持続可能な仕組みづくり、地元農家と都市住民の連携

課題は、肥料成分調製、量の確保、収集等市民の参加インセンティブの仕組みづくりが。

4.行政、学校、専門家、県民、企業等への意見(期待する役割など)

(1) 土地の所有形態、立ち木の所有形態、労働力の都市住民参加など行政、民間企業が資金を提供する官民共同プロジェクトを形成できるようプロセスを含めた総合的な支援。

- ・大学、県等の研究機関や専門家等が参加した、土壌復旧、水脈調査、適正植生、樹木活用事業の実験などの行政施策を指導窓口一本化

(2) 施策の縦割りを排し、施策適用条件で切らずプロセスの支援

- ・農業・林業政策と環境政策の関連性を明確にし、根幹の誰が働くのか、仕組み作りを支援していただきたい。
- ・単に市民NPO参加を条件付けるだけでは不十分である。

(3) 生ゴミ肥料化・農業での活用は循環型社会の必要事項である一方、生産性をあげる農業振興施策にはなじまず、導入過程への自治体補助金交付などに留まらない施策支援。

- ・個人レベルから地域の都市部と農業、里山施策を繋ぐ位置付けの元、成分の調製や収集保管の仕組みなどを研究していただきたい。
- ・関心をもつ企業の参加など行政が企業の積極的参加を求めているいただきたい。

5.自由記述

- ・環境問題に対する地域の大多数の住民意識は、十分ではない。そこで、地域住民の意識を高めるための起爆剤として生ごみを花に変えよう運動を私たちのプロジェクトの1つにしたい。

- ・地元農家の地区と都市住民が協力して産業廃棄物業者を撤退に追い込むことに成功し、次の課題は跡地の復旧となっているが、時間をかけて土地所有者と都市住民が共同して復旧していく土台をつくっていく必要がある。
- ・その際に何か協力したいと思っても何を行ったらよいか明確でないなど困難な課題が多い。まず都市住民がごみ減量化に取り組むことをきっかけに生ゴミ肥料の農業への還元や植生についての興味を持っていただき、循環型社会をめざした実験や検討を視野に入れた展開を図りたい。
- ・跡地回復については、谷津田に張り出した半島のような山を現状の荒地は緊急対策と、中長期の対策を同時に始めないと、土砂流出など里山保全、生物多様性の確保は困難と考えられる。
- ・放置田に樹木が生えている部分なども「利用すること」で生物多様性を確保できることを認識し、地権者、市民参加者の増大を図ることが必要である。
- ・多くの専門家や地元の人自身が主体者としてどうしていくべきかランドデザインを描くところに行き、専門家の支援が重要ではないかと考えます。
- ・市民や企業の参加スキームは明確なテーマとして研究していくことが重要と考えます。気持ちがあっても何をしたら良いかわからないので参加できない人や、色々な参加の仕方があっても良いという前提での仕組みづくりが重要です。
- ・業者に対抗して土地を買い取った後の荒地(実際に残土や廃棄物が入っていない)対策についてご支援賜りたい。
- ・現状が森林でないから多くの施策は適用できない、農業生産には果樹林への転換を一定規模で行う「要件」がある。スギ・ヒノキ林での手入れなども現状の農家が保有する森林の手入れもままならない。雑木林化の場合は利用する仕組みが洲ではないか。

土壌をどのように回復していくか、県林業研究センターなどの共同研究プロジェクトに取り上げていただくなど、地球温暖化対策、里山振興、資源循環、都市住民の参加の仕組み作りを行うことによって生物多様性を確保できるのではないかと

タウンミーティングの名称 千葉環境づくりタウンミーティング（「印旛沼わいわい会議 in ふなばし」終了後）	参加人数 25人
主催グループ名 環境パートナーシップちば	代表者名 加藤賢三
実行委員名 荒尾繁志、桑波田和子、加藤賢三	
開催日時 2006年10月27日(金) 17時00分～18時10分	
開催場所 船橋市 船橋市北部公民館	
プログラムの概要 17:00～17:05 代表者 挨拶 17:05～17:15 (仮) 生物多様性ちば県戦略について (県自然保護課) 17:15～17:25 千葉県環境基本計画見直しについて (県環境政策課) 17:25～17:35 自己紹介 17:35～18:10 意見交換	
論点整理	
1. 解決が必要な問題 <全体として> ＊ 「わいわい会議 in ふなばし」で議論された内容を整理して、環境づくりタウンミーティングの内容に反映させること。 <生物多様性> ＊ 特別な人ではなく、一般の人に、「生物多様性の重要性」、生物多様性が私達の命のつながりにどのように関わるのかを、伝えること。 <農業・環境> ＊ 農業者と消費者との信頼関係づくり、地産地消の取り組み支援、千葉エコ農業の手続きをもっと簡素に。	

2.現在:実践されている取り組み(効果と課題)

現在、飲料として使われている印旛沼の水質はワーストワンといわれている。

印旛沼の再生は我々の最大の課題の一つといえる。印旛沼を再び恵みの沼とするために「印旛沼わいわい会議」などが開催されている。今回の「印旛沼わいわい会議 in ふなばし」では、以下の四つの分科会で活動紹介が行われた。(1)「印旛沼流域でちばエコ農業を推進しよう」、(2)「神崎川の水循環の実態をさぐる」、(3)「地域の湧水池、調整池をビオトープに生かそう」、(4)「川づくりと地域のかかわりを学ぼう」。

現在まで、多くの市民団体、専門家、企業、行政(市、県)の協働が着実に進んでいる。しかし、沼の水質は全く樂觀を許さない現状にあることが、最大の課題である。印旛沼をきれいにするために、生物の多様性を保持した、流域河川・沼の、環境再生、環境学習、これらを総合的に捉えていく、「千葉県環境基本法の見直し」に、一丸となって参画することが必要。

3.今後の取り組みについての提案(想定される効果と課題)

①地域の調整池は、鳥のサンクチュアリになっていたりするので、ここはビオトープなのだという認識を共有することが必要。②湧水の出る所は、民有地であることが多いので、湧水保全の仕組みづくりが必要。そのため、トラスト運動も考慮する必要がある。③農地から肥料・窒素等を川に流さない。窒素削減のために休耕田の積極的利用が急務。④都市河川の水は、いまや貴重な水資源でもある。水際を積極的に多自然型に再生することで生物も多くなり、水の浄化にも役立つ。

4.行政、学校、専門家、県民、企業等への意見 (期待する役割など)

①行政主導型の取組みも重要であるが、県民としてどう動いていったら良いかについて知恵を出し合う場づくりも重要。

②農業従事者など利害がぶつかる可能性のある者も参加を求め、その気持ちも取り入れていくべき。

実効性が重要。県として人員や予算を割いて重点的に取り組むべき。

③地域での活動を活かすこと。そのためには、地元の人がかかることが必要である。

④(仮)生物多様性ちば県戦略作成に農政部局や他の部局がもう少し関わってほしい。

5.自由記述

「いきなり意見を求められても発言できない。県として何を聞きたいかを伝えるべきではないか、この場で一回意見を聞いただけで終わりでは、何にもならない。県民から意見をもらいたいのであれば、詳細な説明資料を示すべきだ。本日の「わいわい会議 in ふなばし」では、印旛沼の環境問題について論議されてきた。この内容も、タウンミーティングの提案として入れるべきだ。

<p>タウンミーティングの名称 手賀沼からの導水を考える (タウンミーティング in 成田)</p>	<p>参加人数 30人</p>
<p>主催グループ名 手賀沼・印旛沼生物多様性・保全・再生実行委員会</p>	<p>代表者名 荒尾 稔</p>
<p>実行委員名 代表：荒尾 稔 実行委員：荒尾繁志</p>	
<p>開催日時 2006年11月9日 17時15分～18時15分</p>	
<p>開催場所 成田市 成田国際会館</p>	
<p>プログラムの概要 17:20 「千葉県環境づくり」 説明 千葉県 17:25 「導水」に係わるタウンミーティングの趣旨説明 荒尾 稔 17:30～18:20 意見の交換とさせていただきます。</p>	
<p>論点整理</p>	
<p>1. 解決が必要な問題</p> <ul style="list-style-type: none"> ・40年前に日本全国で一斉に、かつ大量に使われた除草剤は、不純物が多く、特にダイオキシン類を大量に含み、それが今、千葉県でも手賀沼や印旛沼の底泥や流入河川、そして周辺の田んぼ等の農地、さらに東京湾内に蓄積されたまま、40年以上たっても、その濃度が殆ど減少していないと、本で紹介されている。 泥底に蓄積されたダイオキシンによる障害もあって底性の水草が再生しないという意見も根強く、汚泥移動不可論がある ・現在、印旛沼からは、定期的な東京湾への放水事業により印旛沼内に蓄積された底泥や富栄養分等が、花見川を通り東京湾に大量に流出しています。この水がランドサットの画面等から花見川から東京湾へ扇状に拡散していく行く様子が観察。同じことが手賀沼での導水事業のよって起こっている可能性が高い。下流域でヤマトシジミが壊滅的な打撃を受けたことと、手賀沼での導水による利根川下流域での関連を、県としては早急に科学的にきちんと検証すべきであります。 ・印旛沼周辺での全域に近いほ場整備によって、乾田化した田んぼが広がっています。慣行農法にて農薬や肥料が代掻混ぜ水が印旛沼に、いまでも大量に流入している。また流域での除草剤利用も根強く、空中散布もいまだされている。 ・印旛沼流域、特に上流の本来水源として涵養されるべき箇所、そして印旛沼の周辺地域でも、ゴミの不法投棄の山があり、残土・産廃がとても多い。それらはいまから子ども達の世代へ、何十年にも渡って地下水への汚染が心配でならない。 ・印旛沼に流入する水量の多くを占める、流域での湧き水の量が減ってきている。原因は農業に原因する休耕田や耕作放棄地の激増等も、住宅団地や工場の進出等とあいまって、量的にも質的にも印旛沼等への水質悪化への影響は大きい 	
<p>2. 現在実践されている取り組み(効果と課題)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本日の成田での「わいわい会議」では、印旛沼の水質を改善する為には、何をどうしたら復活出来るのかがメインテーマでした。主に地域の環境問題として4分科会で議論されてきた。この内容をも、今回の「タウンミーティング in 成田」タウンミーティングの内容にも反映させます。 (1)「続けられる農業・期待される農業」 (2)「よみ戻せ！印旛沼の生き物たち」 (3)「知っている！でも出来ない！！～暮らしの中の排水～」 (4)「印旛沼の環境をどのように伝えるか」 ・続けられる農業では消費者・国民が農業をどうまもるかが重要。同時に他力ではなく、自立によって農業再生の機運も ・呼び戻す印旛沼の生き物では、再生に向け冬期湛水・不耕起栽培による田んぼやマシジミに復活等によって、生物多様性と地域再生へは、それらが地域の方々への、新たな有力な収入の糧となるのが必須です。 ・生物多様性を作りだす農業漁業技術の再生が重要であり、飲料水である印旛沼の浄化のためには、各家庭での無洗米の利用など生活習慣の見直しも必要。 ・環境教育としては子供たちを里山等で自由に遊ばせて学ばせる事の必要性が強調された。 	

3.今後の取り組みについての提案(想定される効果と課題)

本質的には、印旛沼を本来の沼として自立させられないかがキーワードとなります。

その中で、春に水面の高さを減水してかつての自然状態までに戻せれば、浅瀬や干潟が露出し、多様な植生が復活し、それを糧として、光合成細菌やイトミミズ(その糞)を糧として小魚やマシジミが激増し、汚泥を吸収して水質浄化が進む。

秋になって不活性になったマシジミは、冬にシベリアから飛来した水鳥(キンクロハジロ)がほぼ食べ尽くして沼外へ排出する。砂礫はイトミミズが砕いてしまうという。要は数千年単位で継続した水質を浄化する自然の力をうまく使えるか

自然界で活発に活動している生き物。生物多様性とは、それら元気の良い生き物に地域を維持管理する機能が天から与えられていて、それが生存価値の大きな部分。なにも意味なく生きているものはいない。

・利根川の天然ウナギ及び汽水性のヤマトシジミの減少は北千葉導水以前からあり、うなぎも同様だが何か他の要因があるのではないか。

・導水開始の数年前から国土交通省は試験的に導水を開始していたとの情報もあります。また、ヤマトシジミは急激な減少開始後ほぼ2ヶ年で壊滅してしまいました。数千トンが収穫されたのが、あっという間に5トンにまで落ちこみ、結果として漁業権の放棄がされています。北千葉導水だけでなく利根大堰による淡水化等での影響等も含めて、ヤマトシジミが壊滅した背景を物語る何か重要な環境変化が予想されています。この原因を科学的な見知で詳細に調査を行い、再生させる方法を見いだすべきであります。原因解明 → 対策 → 復活を目指して考えられます。この原因解明とその防除策の一案として、島根県産ヤマトシジミの稚貝導入も案です。いまこの稚貝はこのような原因にて、全国的に出荷されています。

ヤマトシジミは、稚貝がある段階で汽水性で、一定以上の塩分を必要としている事が分かっています。

・印旛沼周辺域では現在かなりの淡水性マシジミが見いだされています(印旛沼内にはいません)。これらを地域の名産の食材として養殖を考えていると言う報告。

この趣旨の発言に対して、タイワンマシジミという外来種外国産との見分けが難しいものなどもあり、DNA鑑定等を使い種の確定をすべきである。それもDNA鑑定も難しく、千葉県立中央博物館や内水面研究所等の公的機関での種別判定を組織的に出来るかの検討が必要との意見も。

・検査機関としてはそれぞれNPOの仕事分野という意見と、それは行政の仕事という意見がある。

・上流域の湧水が湧き出している箇所のマシジミを保全する事が先決という意見も。

・印旛沼へ流入する小河川では、堤防防いで今でも除草剤が大量に使われている事実もある。除草剤の功罪をもきちんとモニタリングすべき。

・印旛沼の流域でも畑作農業ではプラスチック材を多く使い、これを畑で焼却する人がいる。回収するシステムが必要。

4.行政、学校、専門家、県民、企業等への意見(期待する役割など)

・慣行農法による田んぼの田植え時の、代掻混ぜ水が印旛沼に、いまでも大量に流入している。

・印旛沼の上流域や周辺地域でも、ゴミの不法投棄、残土・産廃による長い年度での地下水への汚染が心配でならない。

・印旛沼に流入する流域で湧き水の量が減ってき、量的にも質的にも印旛沼等への水質悪化への影響は大きい

・この3つはじわじわと印旛沼を汚染する大きな大きな原因となってきている。そのためには地域での農業による汚染や流入する水量等の経年変化や水質管理を司るモニタリングのためのネットワーク構築が緊急に必要です。

・いままで多方面から膨大な調査情報が蓄積されているにもかかわらず、現状ではデータを整備せず、結果として過去と現代との相対した経年変化が十分掌握出来ないまま放置してきた結果が、科学的な見知に組み立て切れずに、ある面どうにもならない現状です。早急なデータベース構築と、WEBGIS 徒の連動によるリアルな現状掌握と対策の立てられる仕組みを

・土地利用計画に関しては、何事にも手続きを踏まえて、土地利用は利用者と地権者等との合意を形成した上で、さらに十分なコンセンサスが必要である。同時に地権者の皆様は、私有の権利と同時に地域価値を向上させるという公共的な大きな義務を負っております。特に上流域での水源涵養林や湧き水等の箇所での、残土・産廃業者等への貸し出しや売却等は、地域に癌を移植するごとく地域価値を落とし、生活環境、農業環境を破壊し、今回で言えば特に印旛沼等へ流入する下流域への長期的な水質汚染を引き起こす大きな原因の一つとなっています。自重をもって行動をお願いします。

・北千葉導水や、利根大堰等による生物多様性への影響など、また印旛沼放水路化等を含めて、河川、農業等での情報の積極的な公開と、行政・大学/研究機関・市民・地権者を交えた市民サイトでの検討会の開催を通じて、農政も河川も、「行政だけの仕事」という考え方を抜本的に変えて欲しい。

・特に40年前のダイオキシンを含んだヘドロの対処に関しては、徹底した情報開示と公開の場での事実検証が急務

5.自由記述

趣旨の説明を県側から、「導水」に係わるタウンミーティングの趣旨の説明。荒尾からダイオキシン及び印旛沼から東京湾への放水の結果を述べて、後は各論に入りました。そのなかで手賀沼への導水の結果として、今も利根川下流域では、汽水域のマシジミの漁業等で大きな影響が出ていると報告されました。ここから、淡水性マシジミや汽水域のマシジミの話となり、活発な議論の中で、特に、関係する漁業者や市民や研究者など皆様から意見がでました。6時30分あつという間の時間で、情報を発言頂く一方で議論が深まりきれなかった事は残念です

タウンミーティング開催結果概要

会議の名称	農薬空散反対千葉県ネットワーク（第2テーマ 生物多様性について）		
日時	平成18年11月19日（日）13:20～16:20		
地域・会場	千葉市 幕張公民館	出席人数	1.5人
主催団体	農薬空散反対千葉県ネットワーク		
講演	<p>○第1テーマ 農薬を使用しない環境に優しい庭づくり（講演）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・庭とは自然を模したものである ①自然界は多様であることが当たり前、 ②「防除」ではなく、「共生」の価値観へのシフト ③農薬のできる前から田畑や庭はあったということを思い出そう ④買い物は企業への投票である——安易に安くて便利そうなものを買わない ⑤身近な緑の生態系を守らなければ、森は守れない <p>○第2テーマ 生物多様性の保全について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・県側から「(仮称)生物多様性ちば県戦略」策定方針等について説明 		
意見等	<p>○農薬による健康被害が出ている。また、国から農薬使用の通知（H15.9月住宅地等における農薬の飛散防止措置等について）が出ているが、県が削減していない。県立学校や県営住宅などではまかないでほしい。</p> <p>○地域で隣がまくと自分のところだけまかないことが許されないようになっている。</p> <p>○国からの通知が、市町村までいっていないのではないか。通知が出てもそれをチェックする体制がないとダメだ。</p> <p>○影響調査やモニタリングが必要ではないか。因果関係をきちんと調査・検討すべきである。過敏性の子供が増えている。どこが原因なのか疫学的調査も必要。</p> <p>○行政は、2～3年で異動がある。このためきちんとした責任体制が取れないのではないか。問題を継続的に受け止めるセンター機能や人員を確保することが必要。</p> <p>○化学物質に強い人、弱い人がいる。弱い人に焦点を当てた施策が必要だ。</p>		

タウンミーティングの名称 生物多様性保全について大網白里町からの提案	参加人数 27名
主催グループ名 環境会議おおあみしらさと21	代表者名 田邊 宏雄
実行委員名 連絡係 武井 實（「森づくりの会」代表） ・「環境会議おおあみしらさと21」代表 田邊 宏雄 ・「自然観察・大網ウォーキング会」代表 上田 弘子 ・「九十九里浜の自然を守る会」代表 鈴木 茂	
開催日時 2006年11月24日18時00分～20時30分	
開催場所 大網白里町 中央公民館	
プログラムの概要 1. 県側から趣旨説明 ・千葉県環境基本計画について ・「（仮称）生物多様性ちば県戦略」策定方針等について 2. 本町の生物多様性保全について参加者からの提案及び意見交換	
論点整理	
1. 解決が必要な問題 ○里山の保全 ・外材輸入による木材価格の低迷により、山林は好条件の平地林でも放置され、荒廃している。これらを有効に活用していく抜本的な改善策が望まれる。 ・経済バブル期に高台山林地に埋め立てられた違法投棄による産業廃棄物をどのように処理していけばよいか、今後の地下水汚染防止対策が必要である。 ・本町唯一の公有林「十枝の森」について、原生林としての保全が望まれる。 ○低湿地帯の管理と植生保全 ・かつての低湿地（沼地）は水田整備による耕土改善事業のため乾田化され、水性動植物は絶滅の危機に瀕している。この解決策が望まれる。 ・降雨時の水害常習地域が多いのに沼地は埋め立てられている。排水対策が急務。 ○九十九里海岸及び浜の植生保全 ・九十九里海岸（白里浜）は、現在、貝類は無くなり、漁船も姿を消した。 ・白砂青松の面影も薄れ、浜の植生も失われた。海浜の緑地の復元、海底の汚泥の除去並びに魚介類の復活、地盤沈下、砂浜減少の防止、等の抜本的な解決策はないか。	
2. 現在実践されている取り組み（効果と課題） ○里山保全対策 ・現在、住民と行政の協働による里山づくりが行われ、2ヵ年を経過した。しかし、一般住民の里山への関心度は低く、里山活用の気運も弱い。従って、第二、第三の里山への動きも鈍い。 ・今後は生活に密着した里山（森林浴、椎茸栽培など）づくりが必要であり、住民の	

健康作り、田園都市文化の創出の観点から、行政と住民が一体となった里山形成が望まれる。

- ・「十枝の森」は、現在、一部有志により管理されているが、今後はボランティア管理による住民憩いの場、子供達の環境教育の場（千葉市の教育の森のような）等としての体制づくりを検討中である。
- ・本町は山林が少なく、ほとんどが平地林のため宅地開発等で伐採され、また、神社仏閣の樹林も年々減少の傾向にある。さらに屋敷林も漸減状態にあり、森づくりの会では、「一人、一年に、一本の木を植えよう」運動を展開している。

○低湿地の活用と植生保全

- ・本町の農地の大部分は水田であり、稲作栽培（経営）基盤の確立が急務であるが、現状は少面積栽培を戸々に継続し、農薬、除草剤の非効率使用が実態である。
- ・今後は、法人組織等、大規模化により、経営改善と同時に、周辺水路の多角的活用を図り、農薬、除草剤の削減による水性動植物への配慮が望まれる。これが住民健康管理にも連動することを町全体で認識することが必要である。
- ・慢性的な降雨時水害を回避するため、現存の沼沢地を改善して大型貯水池を造成し水辺公園として、水性動植物の復元、及び環境教育の場に利用することが肝要である。（本町には小さな子供達が安全に遊べる水辺はない。）
- ・蛍は、数カ所で保護管理に成功しているが、源氏ボタルの増殖地は人害を恐れて公表できない状況である。（NPOより出されたみんなで観察することにより保護するという発言は、今後の植生保存に重要な視点である。）

○九十九里海岸と浜植生の保全

- ・海岸のナガラミ、ハマグリなどはほとんど無くなり、偶に獲れてもヘドロの臭気で食べられない。現在、他所からの稚貝を放流しているが、復元にはほど遠い。
 - ・今後の対策として、海底のヘドロ除去、周辺河川の水質浄化、海岸緑地の復元等が考えられるが、町の規模では実現不可能であり、国家的戦略が必要である。
 - ・現在、ボランティア団体が海岸の緑化に取り組んでいるが、自然の猛威は厳しく、栽植した松苗等は生命を保つのが精一杯で、生育するまでには至っていない。
 - ・かつて自生していたハマナス、ハマボウフウなどは絶えて久しいが、近年、植え付けた苗が生長し、繁殖も確認されている。これらも人に持ち去られる被害が後を絶たない。かつての松林に生えた松露の味が懐かしく思い出される。
 - ・ウミガメの産卵も見られるが、原則的には非公開である。前項と合わせて、みんなで観察することにより、保護される状態へ早く移行したいものである。
 - ・真亀川、南白亀川のサケの遡上も確認されているが、前項同様に、非公開である。
- 但し、一部に密漁の噂もある。

- ・海岸線に沿って波乗り道路が建設され、その際、内陸側の沼地（瀦の名残であり、そのまま残しておくべきもの）に粘土質の土壌を客土したため、降雨後、土壌が固結し、草木の根が伸びられなくなり、枯死に至っている。

- ・前項工事において、排水用の深いU字溝を埋設したため、水が絞られすぎて土壌が乾燥し、樹木の枯死が目立っている。今後は、地下水位を調節できるような装置の設置が望まれる。
- ・春の白里浜には、上記の他、ハマヒルガオをはじめ、数種の海岸着生植物が可憐な花を咲かせている。これらの草花の維持、増殖には、海岸線土壌の土質改良、防風垣根等の設置が必要である。

3.今後の取り組みについての提案(想定される効果と課題)

- ・環境問題全般についての住民全体の共通認識が必要である。そのための地域懇談会等の開催が望まれる。(町広報などでは、あまり読んでもらえない。)
- ・一般的に荒廃した里山の保全は、地域ボランティア活動の範疇を凌駕した問題であり管理手当なども含めて、国、県段階での施策が必要である。第一次産業に携わる人達の経済的基盤をもっと配慮して欲しい。(環境支払制度の導入はどうなっているか)
- ・海底や河川の調査を定期的に実施してもらいたい。九十九里海岸の著しく汚染された水域で、幼子が遊ぶのを見ていると、もはや行楽などではなく、幼児虐待か殺人行為に匹敵する残酷な光景である。
- ・九十九里海岸の砂浜は、かつて200m位あった。現在ではほんの僅かしかない。これらの原因についての調査を実施すべきである。(地球温暖化現象と併せて重要な県と国との問題である)。

4.行政、学校、専門家、県民、企業等への意見(期待する役割など)

- ・一般的に、環境問題は、市町村単位の問題ではない。国→県→市町村→住民という流れの中で、各種の情報が正確に、公平に流れているか否かを絶えず監視する、または監視できる体制を構築しておくことが肝要である。
- ・環境に関する国からの重要な情報が、地方自治体、一般市民、学校、企業体等へ正確に、且つ、公明正大に流れていれば、過去の企業に起因する環境汚染、公害疾病などは、はるかに軽微に推移したであろうと思われる。

5.自由記述

- ・情報化の時代と言われる現在でも、各行政体間で、あるいは、同一行政内部間であっても環境問題に関する認識の温度差に著しい相違(較差)がある現実を、県、各市町村双方で確認・検証して欲しい。(一般市民の個人差はもっと大きい、別問題である)。
- ・環境問題に関する認識の個人差を少なくするには、学校教育での陶冶が最も効果的であると推量する。それらの基盤に基づいて、本環境タウンミーティングも成り立っているものと思われる。
- ・学校教育の場での環境教育が最も重要であり、それらの結果がそのまま企業に移行する図式となっているので、一般企業への環境教育は、むしろ各家庭と学校から推進する方が効率がよいと思われる。(営利企業に対しての情操教育は無意味に等しい)。
- ・生物多様性の保全こそ、環境教育の第一歩である。